

飛鳥井雅有日記注釈

濱口博章 著

濱口博章

飛鳥井

江苏大学图书馆
藏書章

日記注釈

桜楓社

国語国文学研究叢書第40巻

飛鳥井雅有日記注釈

平成二年十月一日 初版印刷
平成二年十月十日 初版発行

定価 四九四四円

本体 四八〇〇円

著者 © 濱口博章

発行者 坂倉良一

印刷所 西村春一

西村印刷 ㊤

101 東京都千代田区猿樂町一―三―一

㊤ 桜楓社

(電話) (〇三) 二九五―八七七一
(振替) 東京 六一―一八〇二〇

Printed in Japan 検印省略 ISBN4-273-02402-0 C3092

飛鳥井雅有日記注釈 目次

仏道の記	五
さがかよひ	三
もがみの河池	一五
みやこぢのわかれ	一七

索引

一 語句索引	一五
二 地名索引	一七
三 和歌索引	一八
四 年月日索引	一八

凡 例

本書は、天理図書館蔵『飛鳥井雅有卿記事』の略注であるが、書名は古典文庫所収『飛鳥井雅有日記』の呼称に従った。

翻刻にあたり、底本を左の如く改変した。

- 一、漢字・仮名を通行の字体に改め、濁点・句読点を施した。
- 二、底本の漢字を仮名に、仮名を漢字に適宜改めたが、表記を改めた箇所右傍に、もとの漢字・仮名を記入した。
- 三、片仮名と平仮名とは区別せず、平仮名に統一した。
- 四、仮名遣は原文のままとし、歴史的仮名遣と異同のある場合は、歴史的仮名遣の仮名を（ ）内に、送仮名を補う場合も（ ）内に記入した。
- 五、底本の朱書部分は「」で囲み、必要に応じて「校注」で補足した。
- 六、「校注」は底本の書写の状態を示す箇所、家集『隣女和歌集』の詞書・歌句の異同箇所、「さがかよひ」において国文学研究資料館蔵本との異同、および参考資料の一部に限定した。
- 七、「注釈」は簡明を旨とし、『隣女和歌集』所収歌は巻文・部立・『新編国歌大観』番号を挙げ（一部は省略）、引歌等で勅撰集を引用する時は、その集名と『新編国歌大観』番号を記した。
- 八、参考資料は「参考」として引用し、必要に応じて適宜解説した。
- 九、底本の丁数を「オ・」で示すが、行数は適宜改変した。

(表紙題簽)

飛鳥井雅有卿記事

白紙」1オ

冬「秘」1ウ

仏道の記

〔目文永二年六年迄之内、但文永五年歟〕

念ぜらる。あまの命いのちとかいふ、かゝることにやあらん。橋本はしもとにてぞ、夜よるになりて遊ぶ。
例の君きみども出いで来て、月あかければ、入海に舟浮うけて、夜よもすがら遊あそぶ。しばし松の
木蔭こかげにやすらひて

〔隣女集〕

潮風しほの涼かぜしき磯いその松蔭かげに① 真砂まさごかたしき月つきを見るかな

鳴海なるみの浦うらにて、潟かたの潮干しほひを待ちしほど

鳴海なるみ潟がた潮干しほひを待まつと松蔭かげに 岩根いはねかたしきこの日暮くらしつ

萱津かやつに着きた様ようば、例れいの海人あまはし走りあり歩く。大雨降ふりて、墨俣河出すのまたで、人も通かよはずといふ。さるは、いつかは人をとといふものもあれば、一日留とどまりて遊ぶ。逢坂あふさかの走井はしりのもとにて、」²⁰

相坂の杉の木蔭こかげに駒とめて 涼しく掬むすぶ走井の水

夜に入いりてぞ嵯峨さがにおちつきぬる。此こ(の)たびは、月つきごろにて、道さへ急いそげば、例れいの病やまひもおこりて、いとゞ心地ちもかき乱みだしたれば、腰折こしをれだにも思おもひ続つづけられず。一日留とどまりて、かの御心地ちもおこたれば、やがて芦屋あしやへ一日に急いそぎ下くだりぬ。

【校注】 ①「に」を「の」に訂した後、再び「の」を見せ消ち

【注釈】 ○あまのいのち——『岩波古語辞典』は「天命」の訓読語か、として延慶本平家の「行家、——生きて摂津へ落ちにけり」の用例を、『日本国語大辞典』は虎明本狂言・天草本伊曾保などを引用し、佐藤恒雄氏(「飛鳥井雅有『無名の記』私注——作為または虚構について」『中世文学研究』第七号、昭和五十六年八月)も漢語「天命」の訓読、海士の命ではないと述べる。『夫木抄』にも引く『千五百番歌合』千八十九番左、「四つの海波静かなる君が代にあまの命もうれしかるらん 小侍従」は、判詞に「あまのいのちいかにぞや覚え侍る」とあるように「あまの命」は耳馴れぬ用語で、延慶本平家などの用例とは少し異なるようである。 ○橋本にてぞ、夜になりて遊ぶ。例の君ども出で来て——『増鏡』第二の源頼朝上洛の項に「建久の初めつきた、都にのぼる。…道すがら遊び

ものども参る。遠江国橋本の宿に着きたるに、例の遊び女おほく、えもいはず装束きて参れり」とある。『吾妻鏡』建久元年十月十八日条参照。 ○月あかければ、入海に舟浮けて——「月あかく

侍しかば、ふねにのり侍て、きみどもおほくあそび侍しに あづまちのおもひいでなれやよもすがら月にさほさすいりうみのふね」（高松宮家本隣女集卷二・雑八五以下の集名略）。後述の嵯峨到着から日程を逆算すると八月六日か七日と思われる。 ○しばし松の木蔭にやすらひて——「はま

なのはしにてやどゝり侍しとき まつかげにこまひきとめて海ごしにむかひのさとのやどをとふかな」（卷二・雑八四） ○潮風の……（卷二・夏・夏月四三） ○潟の潮干——「参考」「潮干のほど

なれば、さはりなく干潟を行く」（十六夜日記）、「尾張の国鳴海の浦を過ぐるに、夕潮ただ満ちに満ちて、今宵宿らむも中間に、潮満ちきなばここをも過ぎじと、ある限り走りまどひ過ぎぬ」（更級日記）、「鳴海潟塩瀬の波に急ぐらし浦の浜路にかかる旅人 大江忠成朝臣」（玉葉集三三九） ○鳴海潟

……「しほのひるほを待侍しとき なるみがたしほひをまつと山かげにをりしあひだにこの日くらしつ」（卷二・雑八七）「潮風の……」の歌と第三・四句が類似するので改めたのであらう。 ○墨

俣河出で——「参考」「洲俣とかやいふ川には、舟をならべて、まさきの綱にやあらん、掛けとどめたる浮橋あり」（十六夜日記）、「洲俣とかや、広々とおびたしき河あり。往き来の人集りて、舟を休めずさし返るほど、いと所狭うかしがましく、恐ろしきまでののしりあひたり」（うたたね）、「暮れてすのまたといふ所に着きぬ。……此所のやう、川よりは遙かに里はさがりたり。前に堤を高くつきたれば山のごとし。くぼみにぞ家どもはある。里の人のいふやう、水いでたる時は、舟この堤の上にゆく。空にゆく舟とぞ見ゆるといふを聞けば、あまのはとぶねの飛びかけりけんも、かくやとぞ聞きゐたる」（春能深山路 十一月十六日）。 ○さるは——「長月の中十日あまり三日の

夜なれば、名を得たる月なり。さるは、嵐山の近きしるしにや、小倉の山の名を変へて……」（さがのかよひ路）。

○いつかは人を——「引歌」「あづまへまかりける人の宿りて侍りけるが、暁に立ちけるによめる くぐつなびく はかなくも今朝の別れの惜しきかないつかは人をながらへて見し」（詞花集二八六） 引歌の技巧として、掲出部分のあとの意味を示すのが普通であるが、こゝは第四句を示して上句の気持をあらわしたのである。

○逢坂の走井のもとにて——「参考」「あふさかにて あづまにていつかといひしあふさかのせきのすぎむらいまぞこえゆく」（巻二・雑七美）、「はしり井にてしばしやすらひて はしり井のみづのうへなるふたものすぎうき山はあふさかのせき」（巻二・雑七美）

○相坂の……「あふさかにて」（巻二・夏四三）「本歌」あふさかの関の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒 貫之（拾遺集二七〇）

○嵯峨——「小倉の山の麓に、母なる人の山里あれば」（さがのかよひ路） ○此（の）たび——今回の意の「この度（たび）」と「旅（たび）」とを掛ける。

○月ごろ——「月のころあい」の意であろう。 ○例の病もおこりて——「早くより病身を去らぬものなれば」（さがのかよひ路）とあり、雅有には持病があったらしい。

○一日留まりて、かの御心地もおこたれば——「京の旧宅に一日侍て、やがて、つの国へまかり侍らんとて よゝをへてのこるみやこのふるさととよばかりのやどりなりけり」（巻二・雑七〇）

「御心地」の「御」は誤写であろう。佐藤氏は「病心地」と訂正する。「おこたる」は病氣回復の意。

○やがて芦屋へ一日に急ぎ下りぬ——「ゐなのにて こまなべてゐなのゝはらをあさ行ば衣でさむしありまやまかせ」（美二）、「上のはらといふ所にて こまとめて上のはらよりみわたせばなにはのうらはたゞふもとかな」（美三）

猪名野・上ヶ原は京から芦屋への道筋で、この時の詠であろう。

「通釈」 祈念せられることである。運命であるとかいう、こういうことなのであろうか。橋本にお

いて、夜になってから遊び戯れる。この地の遊女が数人出て来て、月があかるいので、入り海に舟を浮かべて、一晚中遊ぶ。しばらく松の木蔭で休息して、

潮風が涼しく吹きぬける浜辺の松の木蔭で、砂を敷物がわりにして、きれいな月を見ることがある

鳴海の浦で、浜辺の潮が引くのを待っていた間に、

鳴海潟の潮が引くのを待とうと、松の木蔭で岩に腰掛けて、今日の一日を過ごしたことがたつた萱津に到着したところ、ここの漁師が走り廻っている。大雨が降って、墨俣河が増水し、人も船も通行できないという。そんなわけで、すぐにお別れするのは残念で、という人もあるので、もう一日滞在して遊ぶ。逢坂の走井のそばで、

逢坂の杉の木蔭に駒をとどめて、涼しげに掬い上げる走井の水であるよ

夜になって、嵯峨の家に落着いた。今回の旅は、月を考えてのことで、道中さえゆつくりともせず、急ぐものだから、いつもの持病も起こって、一層氣持もかき乱されたので、腰折れ一首すら、考え続けられない。一日逗留して、あの不快さも収まったので、すぐに芦屋へ、一日のうちに急いで下った。

八月十五夜^同、去年^{こそ}の本意^{はい}とげんと思^{おも}へば、まだ暁^{あかつき}、明石^{あかし}へと心ざして出^いづ。難波^{なには}のこのよしとはなけれど、形^{かた}のやうに続^{つづ}くる。女二、三人ばかり具^ぐして、を^おともその方^{かた}ばかりなる、十人ばかりして、駒並^{こまな}べて行^ゆく。生田^{いくた}の森^{もり}は君住^すまねば、言問^{ことと}ふ事も

なく過ぎぬ。和^わ田^だの笠^{かさ}松^{まつ}を見て、」^{2ウ}

時雨^{ときり}せば蔭^{かげ}にかくれん名^なにし負^おふ 和^わ田^だの岬^{みさき}に立^たてる笠^{かさ}松^{まつ}

須^す磨^まの宿^{すく}に、昼^{ひる}の乾^{かれ}飯^{いひまう}設^{たま}けたれば、立^た(ち)入^い(り)てやがて過^すぐ。一^{ひと}の谷^{たに}のほとりにて
雨^ふ降^ふりぬ。須^す磨^まの関^{せき}屋^やの跡^{あと}に、松^{まつ}の三^{さん}、四^よ本^{ぽん}ある蔭^{かげ}にうち寄^よりて、蓑^{みの}代^{しろ}衣^えなど着^きる。

朽^くち果^はてし須^す磨^まの関^{せき}屋^やの真^ま木^き柱^{しら} 形^{かた}見^みがほにも残^{のこ}る松^{まつ}かな

雨^{あめ}は少^{すこ}し隙^{ひま}あれど、空^{そら}はなほ曇^{くも}りて、甲^か斐^ひなければ。暮^{くれ}(る)ゝ程^{ほど}にぞ明^{あかし}石^{いし}へ行^ゆき着^つきぬる。

〔隣女集〕

芦^{あし}の屋^やの浦^{うら}より浦^{うら}に伝^{つた}ひ来^きて 明^{あかし}石^{いし}も須^す磨^まも今^{けふ}日^ふ見^みつるかな^哉

待^{まち}(ち)えたる今^こ宵^{よひ}の月^{つき}は曇^{くも}れども 明^{あかし}石^{いし}の浦^{うら}の名^なにぞなぐさむ

〔注釈〕 八月十五夜——「夜」の右傍の文字判読。『古典文庫』は「日」とするが、字形からすると「同」である。○去年の本意——「むかしよりおもひしことはこれぞこのこよひの月をあかしに
てみる」(卷二・秋四突) この日記を文永五年の記事とすると、雅有は文永三年四月八日に父教定を
失^うつて服解^{ふくげ}、十月十九日復任であるから、文永四年八月十五日は一周忌後の支障^{しざう}、もしくは鎌倉を
離^{はな}れられぬ事情があつたのであろう。○難波のことのよしとはなけれど——「難波のことの」

は「よし」を導く序。「参考」「ながらへば難波のことのよしあしも思ひしらずと人やみるべき」(拾

玉集二三、「身にあまる難波のことのよしあしも思へば仮のならひなりけり」（正治二年院百首 具親）、「津の国の難波のことのよしあしもわが心には一ふしぞなき」（康永二年院六首歌合 隆職）

○生田の森は君住まねば——「引歌」「津の国にすみ侍りけるころ、大江のためもと任はててのぼり侍りにければいひつかはしける 僧都清胤 きみすまばとはましものを津のくにのいくたのもりのあきのはつかぜ」「大意」津の国に住んでいたころ、大江為基は任期を終えて京に上ってしまったので、あなたがまだ摂津守であつたなら、一緒にと思つていたのに、早くも任果てて残暑きびしい京に帰ってしまった。ここ津の国の生田の森は、すでにさわやかな秋の初風が吹いて居るよ（詞花集三）。雅有は先を急ぐので歌枕「生田の森」をおとなうこともなく通り過ぎたのである。

○和田の笠松——「参考」「しづ枝まで懸れる薦は紅葉して錦を張るは和田の笠松 季経卿」（六百番歌合、薦三番左） 野中春水氏『歌枕神戸』（和泉書院 昭和六十二年六月）「和田の笠松」参照。

○時雨せば——本書以外に所伝なし。 ○須磨の関屋の跡に、松の三、四本——「すまの関や

のあとの松をみ侍て これやこのすまのせきやのまきばしらのこる松さへこけふりにけり」（巻二・雑六）『隣女集』の歌の排列からこの時の詠と思われる。佐藤氏は蟬丸の「これやこの……」の初句を取ったため逢坂の関のイメージが出すぎ、上句と下句が分裂して拙劣の感を否めないと述べる。 ○蓑代衣など着る——「参考」「ふる雪のみのしろ衣うち着つつ春米にけりとおどろかれぬる 敏行」（後撰集一） ○甲斐なければ——佐藤氏「甲斐なければ」と訂正。 ○暮（る）ゝ

程にぞ明石へ行き着きぬる——「あかしへまかり侍し道にて いそづたひ石ふむみちのとをければこまゆきなづみ日もくれぬべし」（巻二・雑六）はこの時の詠か。 ○芦の屋の——「あかしにて」（巻二・雑六）。「参考」「白浪は立てど衣にかさならず明石も須磨もおのが浦浦 人丸」（拾

遺集四七

○待(ち)えたる……「同(八月十五)夜にあかしにまかりて侍しに、くもりて侍

しかば」(巻二・秋四九三)。「参考」「待ちえたる雲井の月も宿らねばおぼろの清水すむかひぞなき

寂然法師」(新千載集二八四)

〔通釈〕 八月十五夜、去年からの念願をとげようと思うので、まだ早曉のうちに、明石へと、心をきめて出発する。よいというわけではないが、形式的に、行列をととのえる。女を二・三人だけ連れて、男も、同じことなら、十五夜の月は明石で、と考えるような者ばかり、十人ほどが、馬をならべて行く。生田の森は、古歌のように、親しい者もないので、おとずれることもなくて、通り過ぎた。和田の笠松を見て、

しぐれたならば、その蔭にかくれよう、有名な、和田の岬に立っている笠松よ

須磨の宿場で、昼の乾飯を準備していたから、そこに入って、食後すぐに出発する。一の谷のあたりで雨が降った。須磨の関屋の跡に、松が三・四本ある蔭に身を寄せて、蓑代りの合羽などを着る。すっかり朽ちてしまった、須磨の関屋の真木柱であるが、その形見のような恰好で残っている松の木であるよ

雨は少し止んできたが、空はまだ曇っていて、はりあいがないけれど。日暮れ方に明石へ到着した。芦の屋の浦から、浦づたいにやってきて、名高い明石も須磨も、今日一日で見たことだよ。期待していた今夜の月は、曇っているけれども、あかるいという明石の浦の名で、心慰められることだ

雨は降るとも、舟に乗りて漕ぎ出でんこそ、様変りたる」³オ 思ひ出ならむとて、大なる舟して、汀とほく出(で)ぬ。おぼろなる波の上に、釣する舟の篝火数しらず。星かと見えて、今宵さへなほ^猶 虫損 しなり。少し更くるほどに、雲なごりなく晴れて、今ぞ此(の)浦の名^{虫損} ひある歌どもありしかど覚え^{おぼ}ず。ある人、

〔隣女集〕

宵の間に曇らざりせば月影の かくばかりやはうれしからまし

〔同〕

曇〔も〕 なき明石の浦の月影に光添へたる海人の漁火

舟の中に、酒飲み連歌して、四、五反、淡路島・明石の間を漕ぎ廻るほど、笛を取り出で、折に合ひたる調子吹きて、海音楽吹くに、思ほえず漕ぎくる舟より、笙・筆簾を吹き合はせたり。折からいひ知らず」³ウ おもしろし。一、二反して、東の舟、西の舟、声たつることなし。暁方になりぬれば、磯の松風吹(き)まさりて、浦伝ふ小夜千鳥の声も物さびし。

〔同〕

明石潟潮風寒く月冴えて 嶋がくれ鳴く小夜千鳥かな

やがて須磨へ、舟にてぞ漕ぎ渡る。

生ける身の思ひ出なれや明石より 月に漕ぎゆく須磨の浦波

明方あけがたにぞ須磨すまに着きぬる。明あけ(け)はてぬれば、駒こまを早はやめて帰かへる。

〔注釈〕 ○釣する舟の篝火数しらず。星かと見えて——『伊勢物語』第八十七段をふまえているのである。 ○少し更くるほどに、雲なごりなく晴れて——「ふくるほどに、はれて侍しかばよ

ひのまに：」(巻二・秋四四)、「月の歌中に ふくるまでながめざりせばよひのまにくもりしまの月にやあらまし」(五二五)

○ある人——次の二首は『隣女集』所収の雅有の歌であるから、作者自身を臘化した表現。

○曇も「も」なき：——本文「曇」と「な」の間に朱で。印、右に「も」を書き入れる。仮名書の「くも」を速断して漢字「曇」と書き、後に不完全な訂正をしたと見做すならば「くももなき」と考えられる。『隣女集』は「いさりびをみて くまもなきあかしのおきの：」

(四九)とする。下句は「光添へたる夕顔の花」(源氏物語・夕顔巻)の影響か。「参考」用語としては「隈もなき」が普通のようなのであるが、「雲もなき」の用例もある。『夫木抄』から「雲もなき(く)」を抄出する。「雲もなき嵐ばかりを雪げにてさやけき月の影のさむけさ 少将内侍」(六五七)、「雲

もなく晴れたる空に降る雨は法のうるひのはじめなりけり 衣笠内大臣」(七九七)、「雲もなく空晴れわたる峯だにも雨をふくむは松の音かな 前中納言定嗣卿」(三三六) ○淡路島・明石の間

を漕ぎ廻るほど——「船にのりて読侍し あかしがたおきにこぎいでて月みるをつりするあまの名をやたつらん」(巻二・秋四七)、あかしがたきよき月よにこぎゆけばあはぢのしまにちどりともよぶ

(四八)」。次の二首も歌の排列から考えて同時の作であろう。「こころある人こそなければあきのよの月もなだかきうらのとまりに」(四九) むかしよりおもひしことは：(既出四八)」。 ○海青楽——

黄鐘調律。『源氏物語』に「海仙楽」とある。「たそがれ時に、御舟さし寄せて遊びつつ、詩作り